世田谷村日記

石山修武

六月九日

朝七時エゴン・シーレ読了。健全な自然はシーレを生まなかった。都市ウィーンがシーレを生んだ。エゴン・シーレの絵の、現代のカリカチュアとの異常な類似。現代のカリカチュア（特に日本の）のエロス、より直截なセクシュアリティへの関心、余りにも直接的なそれとの類似は何を意味しているのだろうか。ＴＯＫＹＯは一九〇〇年初頭のウィーンなのか。アドルフ・ロースの言説は一九〇〇年初頭のウィーンの崩壊、具体的には病気の蔓延状態と関係しているのだろう。エゴン・シーレの父、アドルフはニーチェ同様にどうやら梅毒で死んだらしい。その末期は精神錯乱状態であった。ウィーンは娼窟の巣でもあった。カフェ文化を介して、アドルフ・ロース、オットー・ワーグナーそして十代後半、二〇代の始まりのエゴン・シーレは接触していた。そこからロースの言説、装飾は罰であるが生まれた。今のＴＯＫＹＯに梅毒がはびこっているとは思わぬが、同様の病巣が膨れあがっているのは確かだろう。ケイタイは梅毒である。オタク現象、引き込もり、ノンコミュニケーション社会的不感症は精神病の一種ではないか。エゴン・シーレを読了しての印象だ。近代絵画が芸術家の個性・才質を中心に生まれるようなものではないのは確かであろう。裸形の才質なぞはあり得ぬ事を坂崎乙郎は描いている。

六月十日

七時屋上菜園。朝顔が葉を出していた。カンボジヤの匂い草は顔を出していない。枝豆のツルをはわせる竹の棒を継ぎ足した。パンツ一丁でこんな事やってるのは廻りの人々はきっと視ているんだろうな。ズボンくらい身につけた方が良いかも知れんな。でも面倒くさい。裸じゃなければ良いか。

十六時雑用を終えて研究室でボーッとしている。

二十二時前京王線新宿駅。電車の中で手持ち無沙汰にしている。今眼前にしている車内の現実が真の現実とは言い切れぬところに現代の危機があるように思うが、確信はない。

六月十一日

十四時、スタジオＧ宮脇愛子さんレクチャー。学生大人しい。鈍いのかな矢張り。いい話しが出てるのにな。

六月十二日

朝宮脇愛子さんよりＴＥＬあり、「学生さん皆大人しいわね」佐賀の時の学生の方が元気だったと言う。全く同感である。終日世田谷地下で打合わせ。シンプルな一日だった。生活用品が少しずつではあるが動いているのが収穫だ。大連のプロジェクトのスケッチすすめる。

六月十三日

梅雨空でうっとおしいが、気持ちもうっとおしくしてはイカン、と自分で自分に言い聞かせるが、やっぱりうっとおしいのである。日記のメモが少ない時は、建築のスケッチブックの方の頁数が延びているのに気付く。とすれば、どちらが良いのかは、今のところ良く解らぬところがある。「森の学校」のエスキスを本格的に

スタートしよう。朝山さんの娘さん、恵さんから手紙いただいた。
彼女も日記を読んでいることが判明する。